

美術の窓(18)

ルーヴル美術館について

大和文華館館長 吉川逸治



モナリザ レオナルド



美しき女庭師 ラファエロ

昨年末、ルーヴルの美術館長さんが大阪来訪の折、一日東大寺に招待され、帰りに大和文華館に立寄られ、熱心に本館新設の美術研究所のコンピュータ・システムによる美術研究方法を見学してゆかれ、流石、先端技術の国の美術研究法の開発振りに接しましたといっただけで帰られました。

ルーヴル美術館は、十六世紀初め、元来ゴシック美術の本国であったフランスが、イタリアに攻め入って、かの地の美術に驚いて、一挙に自分たちもルネサンス美術を学んで、新しい時代の美術を興そうと、新建築様式で宮殿建設を始め、次々に歴代の王が増設に努め、大きな石柱の立ち並ぶ大玄関を建てさせた十七世紀のルイ十四世まで続きます。

ここで国王の関心はヴェルサイユ宮殿の造営に集中し、宮廷も移り、ルーヴルは十七、八世紀は、主として美術品の陳列場、美術家の制作場、住居という、美術館と美術院、美術学校を兼ねた宮殿となり、その一劃のサロンで隔年ごとに国立美術館の展覧会が催され、サロンが展覧会を意味し、客殿廊

(ガレリー)が画廊を意味する由来となります。

フランス国王も大臣、宰相も、イタリアの名品を集め、ローマの古代美術品を集めますが、それは唯鑑賞するだけではなく、自分の国もイタリアのように、これまでの民族臭の強いゴシック美術をやめて、国際性のある古典古代の美術様式を制作する中心となり、国民の趣向も古典主義で高め、文学とともに美術も古典美術を制作しようと奨励するのです。フランソワ一世は、そのためレオナルド・ダ・ヴィンチを招き、さらに成功させませんでした。ミケランジェロを招いて、自国の美術を一新し、興隆させようと努めるのです。この方針が、その後のフランスの美術政策につづいて、今日なお、ローマにアカデミーを持って、ローマ賞を得た学生たちを留学させ、古典を学ばせています。

フランス大革命、ナポレオン時代は、ルーヴル宮が大美術館と発展する機会を与えます。国立アカデミーを廃止し、美術学校をセヌヌ河の対岸に新設して、ルーヴル宮は美術館一本立てとなり、戦利

品の美術品をここに集めて、大きなナポレオン美術館が開設されるのです。しかし、彼が歿落すると、外国から取ってきた作品は持去られ、従来のフランスの所有する作品だけになりましたが、それでもレオナルド、ミケランジェロ、ティティアーノ、ラファエロ、ヴェロネーゼなどの大傑作は残り、画学生たちの模写する機会を与え、またリュベンス、レンブラントあるいは中世末期の宗教画の名品が集められ、美術館の名目は保ちます。

しかし、十九世紀に古代ギリシア、ローマの考古学が興隆するに及んで、そのため、ルーヴルにはパルテノン彫刻からミロのヴィナスまで古典美術の原作が陳べられ、ギリシア古拙時代の傑作からローマ皇帝の像も集められますが、新たに古代エジプト、古代オリエンツ考古学の発達にフランスの目ざましい貢献の痕を示すそれぞれの傑作が所せまると、ルーヴルに陳べ、満たされ、古代考古学の部門がルーヴルの重要な一大陳列系列を形成することになります。したがって、ルーヴル宮の博物館としての増築が大規模に着手され、

ことにナポレオン三世の華やかな時世を反映した様式で、今日のルーヴルの外貌が形成されています。

かつて、イタリア・ルネサンスの絵画が陳列の主流を占め、その傍にフランドル派、オランダ派の傑作が、魅力深き一劃を形成していましたが、戦後は、主流を十七世紀、あるいは中世から十六世紀をへて、偉大なる世紀(十七世紀)のフランス絵画の陳列と、十八世紀末の大革命からナポレオン時代、ドラクロワ、アングルからクールベに至る十九世紀の大作のひしめく陳列に移し、印象派および後期印象派は別に一館に収められて、ルーヴルから独立しました。

しかし、これはさらに、他の同時代の作品とともに、大きな十九世紀美術館(オルセー美術館)が近々開設されて、そこに移される由です。さらに、二十世紀美術はボンピドー・センターに陳列されることになります。

フランスの美術館に対する方針は、つねに時代と共に生き、時代の美術制作に資するという観点に立ち、美術歴史の館という考えではありません。

季刊 美のたより No.74

昭和61年2月20日

発行 大和文華館